特集
毛呂山人物伝

源頼朝に厚遇された鎌倉武士 毛呂季光（もろすえみつ）

明治15年（1882）9月、毛呂氏子孫の山田吉令（よしのり）、大谷木季利（すえとし）らによって大谷木地内に建てられた「季光公之碑」

毛呂の姓を持ち、毛呂山の地に居（きょ）を構えたとされている鎌倉武士「毛呂季光」。季光は鎌倉幕府を開いた源頼朝に重臣として仕えるなど、毛呂氏のなかでも最も活躍したとされる人物です。しかし、その名は、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡（あづまかがみ）』にたびたび出てくるものの、詳しい功績などはあまりわかっていません。

この特集では、数少ない史実を紹介することで、毛呂季光の功績などに迫ります。

毛呂季光が生きた時代の年表

保延（ほうえん）3年（1137）	◆毛呂季光、この頃に生まれたのではないかと推測される
久安（きゅうあん）3年（1147）	源頼朝、義朝の三男として生まれる。母は熱田大宮司藤原季範（すえのり）の女
保元（ほうげん）元年（1156）	保元の乱／崇徳上皇、讃岐国（現香川県）へ配流される
平治（へいじ）元年（1159）	平治の乱／平清盛、藤原信頼・源義朝らを破る
永暦（えいりゃく）元年（1160）	源頼朝、伊豆国（現静岡県）へ配流される
仁安（にんあん）2年（1167）	平清盛、従一位太政大臣に昇進する
治承（じしょう）4年（1180）	源頼朝が伊豆で挙兵する ◆源頼朝が相模大倉郷の新第（しんだい）に移る際、毛呂季光が頼朝の御駕（ぎょが）に供奉（ぐぶ）する（『吾妻鏡』）

毛呂季光像（想像画）
（杉田鐘治（しょうじ）氏画）

毛呂季光が生まれた頃の時代背景

毛呂季光が生まれたのは、平安時代（794～1185年頃）末期。そのころの政治の中心は、京都であり、院政時代であった。院政とは、院号を得た上皇または法皇が、直系の子孫にあたる天皇を後見しながら国政を主導する政治形態のことである。季光が生まれたと推測される頃は、鳥羽法皇が院政をしていた。

しかし、1156年の保元の乱、1159年の平治の乱によって、武士による政治への進出に拍車がかかり、時代は院政から武士が実権を握る世へ移っていった。平治の乱で、藤原通憲（信西）と結んだ平清盛は、藤原信頼・源義朝らを敗り、政権を掌握することとなる。

源頼朝の台頭と毛呂季光

平治の乱で敗死した源義朝の子、頼朝は、1160年に平清盛によって伊豆国（現在の静岡県）に配流されるが、20年後の1180年に伊豆で平氏打倒の兵を挙げる。同年10月、隅田川に陣を張った頼朝のもとに、毛呂季光は、畠山重忠とともに招かれ参向したとされている（『大谷木家系図』）。

その後、源頼朝は、1184年に弟である源範頼・義経を遣わし源義仲を倒し、翌1185年に壇ノ浦において平家を滅ぼす。そして同年、守護・地頭を設置することで、武家による全国支配の道を開いた。また、1190年には、奥州藤原氏を滅ぼし、1192年、征夷大将軍になり、鎌倉幕府を開いた。

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』によると、毛呂季光は、1180年に源頼朝の陣に参じてから後、常に頼朝の側に仕えていたことがわかる。

伝源頼朝像（京都府神護寺所蔵）

鶴岡八幡宮（鎌倉市）

◆毛呂季光の主な動き

寿永2年（1185）	平家、壇ノ浦に滅ぶ	◆源頼朝、毛呂季光を豊後（現大分県など）国司に推挙する（『吾妻鏡』）
文治2年（1186）	◆毛呂季光、鎌倉に出府し、頼朝に盃酒を献ずる（『吾妻鏡』）	
文治4年（1188）	◆源頼朝、鶴岡八幡宮の大法会に臨む。毛呂季光らこれに随う（『吾妻鏡』）	
文治5年（1189）	源頼朝、奥州征伐に出発する ◆源範頼・毛呂季光らこれに随陣する（『吾妻鏡』） 源頼朝、藤原泰衡を討ち、奥州を平定する	
建久元年（1190）	源頼朝、上洛する ◆畠山重忠・毛呂季光ら武蔵武士がこれに随う（『吾妻鏡』）	
建久2年（1191）	鎌倉大火 ◆鎌倉大火の報に、毛呂季光、最前に馳せ参じる（『吾妻鏡』）	
建久3年（1192）	源頼朝、征夷大将軍に任ぜられる ◆源頼朝、永福寺の落慶供養に臨む。毛呂季光らこれに参列する（『吾妻鏡』）	
建久4年（1193）	◆毛呂季光、源頼朝の曽我五郎尋問に陪席する（『吾妻鏡』）	
建久5年（1194）	◆幕府、祈願寺社の奉行を定め、三浦義澄らを永福寺の奉行、毛呂季光を同寺薬師堂の奉行とする（『吾妻鏡』）	
建久6年（1195）	◆毛呂季光、中条家長と相争い合戦に及ばんとする。幕府、和田義盛をしてこれを和解せしむ。家長出仕停止。季光、頼朝より直接の注意のみ（『吾妻鏡』） ◆源頼朝、東大寺供養に臨む。毛呂季光・山名義範・大内惟義ら参堂する（『吾妻鏡』） ◆源頼朝、鶴岡八幡宮臨時祭に臨む。北条泰時・毛呂季光らこれに供奉する（『吾妻鏡』）	
正治元年（1199）	源頼朝（53歳）没する	
建仁3年（1203）	北条時政、比企能員を殺害する	
建永元年（1206）	◆毛呂季光、没すると伝えられる（『「毛呂系図」栗原本等』）	

『吾妻鏡』に書かれた毛呂季光の活躍

【巻一】（左写真）
治承4年（1180）12月
　頼朝、新造の大倉邸に移徙の儀を行う。毛呂季光は頼朝の馬の右に供奉する。

【巻六】（右下写真）
文治2年（1186）2月
　頼朝、諸国の国司の事について、数か条を京都へ奏上する。毛呂季光を豊後国の国司に推挙する。
同年6月
　毛呂豊後守季光、頼朝へ盃酒を献上する。
文治4年（1188）3月
　鶴岡八幡宮で大般若経の供養大法会が行われる。毛呂季光、頼朝の御後に布衣を着て供奉する。

【巻九】
文治5年（1189）6月
　鶴岡八幡宮の御塔の供養に、毛呂季光、頼朝の御後に列を組んで従う。
同年7月
　毛呂季光、頼朝の奥州征伐に従い出陣する。

【巻十】
建久元年（1190）9月
　頼朝上洛する。毛呂季光は一門に列せられ、随兵記に「殿」の字が加えられた。
同年11月
　頼朝行列、六波羅に到着する。毛呂季光後陣の随兵（十三番目）として従う。

【巻十一】
建久2年（1191）3月
　鎌倉大火により幕府、鶴岡若宮、御家人の屋敷等焼亡する。毛呂季光最前に馳せ参じる。

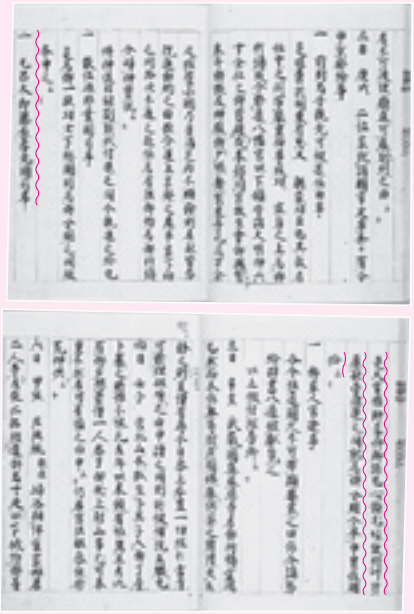
【巻十二】
建久3年（1192）11月
　鎌倉永福寺の供養が行われた。毛呂季光、頼朝の御後の供奉人として布衣を着て従う。

【巻十三】
建久4年（1193）5月
　頼朝、曾我五郎を尋問する。毛呂季光その場に伺候する。

【巻十四】
建久5年（1194）12月
　毛呂季光、永福寺薬師堂の奉行人になる。
　永福寺内に新造された薬師堂の供養が行われ、毛呂季光、布施取役を勤める。

【巻十五】
建久6年（1195）1月
　毛呂季光、中条家長（現熊谷市出身の御家人）と喧嘩を起こす。
同年3月
　頼朝、石清水・佐女牛若宮八幡宮の臨時祭に参詣する。毛呂季光後騎を勤める。
　頼朝、東大寺供養のため、奈良東南院（大仏殿の東南にあり、現在の東大寺本坊）に到着する。毛呂季光、狩装束で頼朝の御車に従う。
　頼朝、東大寺の供養に参堂する。毛呂季光らこれに供奉する。
同年4月
　頼朝、石清水八幡宮に参詣する。毛呂季光、前駆を勤める。
同年5月
　頼朝、四天王寺に参詣する。毛呂季光、頼朝の御車の御後に水干姿で従う。
同年8月
　鶴岡放生会が行われ、毛呂季光ら召された廻廊に伺候する。
同年10月
　鶴岡臨時祭が行われ、頼朝、参詣する。毛呂季光ら、これに供奉する。

「加々美次郎長清が（頼朝の）馬の左につき、毛呂冠者季光が同じく右についた」
『吾妻鏡　巻一』（国立公文書館）



「一、毛呂太郎藤原季光を国司に任ずべき事
この者は、大宰権帥（藤原）季仲卿の子孫である。性格はすこぶる穏やかで、（後白河院の）お考えによく叶うでしょう。何にせよ適当であるので、（頼朝の）御分国である豊後国に推挙申し上げる」
『吾妻鏡　巻六』（国立公文書館）

考察「源頼朝と毛呂季光」

毛呂山町文化財保護審議委員長　内野勝裕

毛呂季光は、鎌倉幕府を開いた源頼朝の側近として活躍した武蔵国（埼玉県など）を代表する鎌倉武士です。ところが、同じ鎌倉武士でも江戸時代から人気があった畠山重忠や熊谷直実などと比べて、あまり目立った存在ではありませんでした。これは一つに季光が、『平家物語』などに登場することがなく、源平合戦などで戦場を駆け回るといった働きがなかったことによるものと推察できます。また、重忠をはじめ、比企氏など多くの鎌倉武士が北条氏との政争に敗れ、悲劇的な最期を遂げましたが、季光にはそのようなことがなかったことも、その一因と考えらます。しかし、近年一般向けの鎌倉時代の研究書にも、季光の幕府内の重要性が認識されるようになってきています。

季光が、頼朝の御分国（知行国）の一つであった豊後国（大分県など）の国守に推挙され、源氏の門葉（一族）に准ずる待遇を受けていたことは『吾妻鏡』が記するところです。これは伊豆に配流中の頼朝を物心両面から支えた比企氏や他の功臣に比べていかにも殊遇といえます。武蔵武士として、さしたる軍功もなく、それほど大きな勢力でもなかったと考えられる毛呂季光が、なぜここまで頼朝に厚遇を受けたのでしょうか。『吾妻鏡』は、「毛呂太郎藤原季光国司の事」で、推挙の理由の第一に「これ大宰権帥季仲卿の孫なり」を挙げています。季光の出自である小野宮家は、その祖である摂政関白太政大臣実頼は別格としても、代々二位、三位の階位を授けられた上級貴族でありました。しかし、藤原氏を祖にもつ鎌倉武士は多く、それだけで頼朝が季光を准門葉（門葉に准じた処遇）としたとは考えにくいのも事実です。

頼朝の母が熱田大宮司藤原季範の女であったことは一般的に知られていますが、実は女系をたどると、頼朝と季光は血が繋がっていたと考えられるのです。熱田大宮司家は藤原南家の一流の家柄、季光の小野宮家は九条家に次いで藤原北家を代表する家柄です。いわば熱田大宮司家と小野宮家そのものが遠戚なのです。すなわち、季範の高祖父永頼と季仲の高祖母は兄妹（姉）で、藤原南家７代尹文の子なのです。頼朝が季光を源家一門に准じた理由は、このあたりにあったのではないかと考えます。

◆毛呂季光のことをもっと知りたい人のために！

毛呂山町合併60周年記念 第18回特別展『鎌倉御家人・毛呂季光の活躍と末裔たち』

日にち　11月15日(土)～平成27年1月25日(日)

内容　歴史書の中に記された毛呂季光と、戦国時代に再び歴史の舞台に登場する季光末裔の毛呂一族の活躍を紹介します。

毛呂氏ゆかりの三山を歩く

日　11月30日(日)午前9時～午後3時

内容　臥龍山、龍ケ谷山、石尊山を巡り、毛呂氏ゆかりの寺院、城館を訪ねます。

集合場所　出雲伊波比神社

持ち物　弁当、飲み物、歩きやすい服装・靴

郷土歴史講座『(仮)源頼朝と毛呂季光』

日　12月7日(日)午後1時30分～3時30分

内容　毛呂季光が鎌倉幕府の初代将軍源頼朝に重用された背景などを紹介します。

【共通事項】

申・問　歴史民俗資料館☎295－8282

※定員、申込み期間などの詳細は、歴史民俗資料館へ、直接お問い合わせください。

治承4年頼朝鎌倉入邸随行図（想像画）
（杉田鐘治氏画）

資料提供
P3 伝源頼朝像（京都府神護寺）／P3 鶴岡八幡宮写真（鎌倉市鶴岡八幡宮）／P4 吾妻鏡（国立公文書館）／P3 毛呂季光像、P5 治承４年頼朝鎌倉入邸随行図（杉田鐘治氏）／P2-5 歴史民俗資料館

参考文献
毛呂山町史／新毛呂山町史／毛呂山町史料集【第３集】源頼朝の重臣『毛呂季光』／改訂版日本史Ⓑ用語集（山川出版社）